

【主題】 担当制保育が子どもの情緒安定に与える影響

【副題】 ～特定保育者との継続的な関わりがもたらす変化～

なごみ保育園分園

【クラス名】 ばんび組

① はじめに

乳幼児期は、特定の大人との安定した関わりの中で安心感を得ながら生活することで、情緒が安定していく重要な時期である。そのため、担当保育者が少人数の子ども達と深く関わることで、集団行動では難しかった部分にも丁寧に対応しやすく、一人ひとりをよく理解してきめ細やかな保育が実現できるといえる。

バンビ組では、子ども一人ひとりとの愛着関係をより丁寧に築くことを目的に担当制保育に取り組んでみたいと考えた。現状で出来そうな担当制保育を考え、バンビ組なりのゆるやかな担当制保育を実施してみた。1年間の実践を通して見えてきた成果と課題についてまとめていく。

② 実践内容

担当の子どもは、0歳児と1歳児を半分ずつ分けて編成した。

(1) 給食

当初は、0歳児と1歳児で机を分け、それぞれに保育者がついて給食の援助を行っていた。しかし、複数の子どもに同時に関わる中で、全員の食の好みや食べ方の様子を十分に把握することが難しいという課題があった。

そこで担当制保育を取り入れ、スプーン・フォークで食べ始めたり、好き嫌いが見られるようになってきた1歳児に対して、担当の保育者が継続して関わるようにした。その結果、一人ひとりの食事量や好み、食べ方の特徴などを把握しやすくなった。

一方で、1歳児に担当保育者がつくことで、0歳児の様子を十分に見ることが難しくなるという課題も生じた。そこで、パート職員にも担当を決め、週ごとに交代しながら0歳児と1歳児の食事を援助する体制に整えた。

これらの対応をした結果、担当の子ども一人ひとりに合わせた関わり方や声掛けが出来るようになり、食事の様子や変化、おうちでの様子なども保護者と共有しやすくなった。また、好き嫌いがある子どもにも、個々に合わせた対応が出来、安心して食事を進められる姿が見られるようになった。

<給食時の様子>



(2) 登降園の対応

登園時には、保護者に対して担当の保育者が対応し、子どもの家庭での様子を聞いたり、園での様子を伝えたりするようにした。担当の保育者が継続して関わることで、保護者との信頼関係が築きやすくなり、子どもの様子についても共有しやすくなると考えた。さらに、日々のやりとりを積み重ねることで、保護者からの相談や不安の声も聞き取りやすくなり、家庭と園が連携しながら子どもの成長を支えていくことの重要性を改めて感じた。

当初は正職員が3名配置されていたため、担当の保育者が登園時・降園時ともに対応することが可能であった。しかし、途中から職員が2名体制となったことで、朝の受け入れを遅番以外の保育者が担当する必要が生じ、担当の保育者が対応することが難しい場面が見られるようになった。また降園時においても、休憩

時間との兼ね合いにより、担当の保育者が必ずしも対応できない状況が見られた。このことから、担当制保育を継続して行う上では、職員配置や時間帯の調整など、園全体での連携や工夫が必要であることが今後の課題として挙げられた。

(3)連絡帳の記入

連絡帳については、当初は職員がランダムで記入する子どもを決めていたが、日々継続して関わっていない子どもの様子を思い出すことが難しいという一面があった。そのため、生活面での具体的な様子や小さな変化を十分に伝えきれないことが課題として見られた。

そこで、担当制保育を取り入れ、担当の子どもの連絡帳を担当の保育者が記入するようにした。継続して関わることで、その日の生活や遊び、食事などの様子を具体的に記入しやすくなり、子どもの姿をより丁寧に伝えることが出来るようになった。

また、保護者との連絡帳でのやりとりが増え、家庭での様子を詳しく教えていただける場面も見られるようになり、保護者との関係作りや連携の充実にも繋がった。

一方で、0歳児と1歳児が部屋を分けて活動する日はそれぞれに正職員が入る関係で、担当の子どもの様子を把握することが難しい場面も見られた。そこで、0歳児と1歳児がそれぞれの部屋で遊んでいる際にも、保育者同士で声をかけ合いながら交代して様子を見るようにした。しかし、週ごとに0歳児と1歳児の主当番を交代で担当していたため、担当する年齢が変わることで、その日の遊びを展開しにくい一面も見られた。そのため、0歳児と1歳児で活動が分かれている日には、それぞれの主当番の保育者が記録を行うようにした。実際に関わった保育者が記入することで、子どもの遊びや展開、興味、友達との関わりなどをより詳しく具体的に連絡帳で伝えられるようになった。

(4)オムツ替え

春頃は、遊びの中で一斉にオムツ替えを行っていた。しかしこの方法では、子ども一人ひとりと丁寧に関わる時間が少ないという課題があった。そこで担当制保育を取り入れ、遊びの空間とは別の場所にマットを敷き、保育者と子どもが一对一で関わりながらオムツ替えを行う方法に変更した。

一对一で関わることで、着脱の様子や身体の動き、

排泄の様子などをゆっくり見ることができ、子どもの成長過程を把握しやすくなるというメリットが見られた。

<オムツ替えの様子>



一方で、一人ひとりに関わる時間が長くなることで、オムツ替えに時間がかかるという課題も見られた。また、1歳児はズボンの着脱をゆっくり行うため、全体の流れが遅くなることもあった。

そこで時間短縮を図るため、パート職員と正職員の二名でチームを作り、赤チームと緑チームに分かれて対応する方法を試みた。0歳児は、パート職員、1歳児は正職員がそれぞれ担当し、一対一でオムツ替えを行った。この方法により、オムツ替えの時間は短縮され、子どもの成長過程について職員同士で共有することもできた。しかし、0歳児または1歳児のどちらかの子どもと直接関わる機会が少なくなるという課題が見られた。

そこで体制を見直し、赤チームの正職員と緑チームのパート職員、緑チームの正職員と赤チームのパート職員というようにチームを編成し、それぞれが0歳児と1歳児の両方に関わる体制とした。また、0歳児と1歳児の担当は週ごとに交代するようにした。担当は交代制であるものの、関わる職員はほぼ同じであったため、子どもたちは落ち着いて過ごしていた。

しかし新たな課題として、0歳児は職員がオムツ替えを行うのに対し、1歳児はズボンの着脱を自分で行う時間を多く取り入れているため、オムツ替えにかかる時間に差が生じることが分かった。その結果、オムツ替え後の活動の開始時間に影響が出る場面も見られた。

この課題に対して、担当チームごとに部屋を分け、0歳児と1歳児がそれぞれの空間で遊びながらトイレやオムツ替えを行う方法を試みた。しかし、この方法では春頃と同様に同じ部屋で0歳児と1歳児が一斉にオムツ替えを行う場面も見られたため、担当の子どもを中心にオムツ替えを行うようにした。

その後、進級に向けた取り組みとして、玩具を片付けてから0歳児と1歳児で部屋を分けてオムツ替えを行う方法を試した。しかし、0歳児は玩具がない環境では落ち着いてオムツ替えを行うことが難しい様子が見られた。そこで、0歳児は遊びの中でオムツ替えを行い、1歳児は玩具を片付けてからトイレやオムツ替えを行うようにした。活動ごとに区切りをつけることで、生活の流れを意識できるようにした。

このような方法で行った結果、0歳児は遊びの中でゆったりとした雰囲気の中でオムツ替えを行うことができ、安心して過ごす姿が見られた。一方、1歳児は友だち同士で影響を受けたり競い合ったりする姿が見られ、ズボンの着脱を自分で行おうとする意欲が高まり、スムーズにオムツ替えを行うことができるようになった。

以上のことから、担当制保育の中で行うオムツ替えは、一対一の関わりの中で子どもの成長を丁寧に把握できるだけでなく、子どもの発達段階に応じて方法を工夫することが重要であると考えられる。今後も子ども一人ひとりの発達や生活の流れを考慮しながら、より良い排泄援助の方法を検討していきたい。

(5)寝かしつけ

春頃は、毎日違う子どもを寝かしつけていた。そのため、特定の保育者が継続して関わることが少なく、子ども一人ひとりの入眠の様子を十分に把握することが難しい状況であった。

そこで担当制保育を取り入れ、担当ごとに寝る場所を大まかに決め、担当の保育者が中心となって寝かしつけを行うようにした。この方法により、自分の担当の子どもたちの様子を近くで見ながら寝かしつけることができ、子どもの眠りにつく様子を把握しやすくなった。

しかし、隣同士で寝る子どもの相性によっては落ち着いて眠ることが難しい姿も見られた。そのため、子どもが安心して眠れる環境についてさらに検討する必要があると感じた。

その後、8月7日に行われた保育教諭研修会で担当制保育に関する研修を受け、子どもが毎回同じ場所で眠ることで安心して眠りにつきやすくなることを学んだ。そこで一人ひとりの寝る場所を決め、担当の保育者が継続して寝かしつけを行う方法を取り入れた。

この方法で実践した結果、毎回同じ場所で寝るようにしたことで、子ども自身が自分の寝る場所や位置を理解するようになり、自ら布団へ向かう姿が見られるようになった。また、同じ保育者が寝かしつけを行うことで安心感が生まれ、これまで入眠までに時間がかかっていた子どもも徐々に入眠が早くなり、落ち着いて眠ることができるようになった。

さらに担当制保育を取り入れたことで、子ども一人ひとりが落ち着いて眠ることができるよう、時間差で寝かしつけを行う方法を取り入れた。時間差で行うことで一人ひとりゆっくりと関わることができ、優しく声をかけながらリラックスできる環境を整えることができたと感じている。

以上のことから、担当制保育の中で寝かしつけを行うことは、特定の保育者が継続して関わることで子どもに安心感を与え、落ち着いて眠りにつくことにつながると考えられる。また、毎回同じ場所で眠ることは子どもの生活の見通しを持たせることにつながり、スムーズな入眠につながったと考えられる。

今後も子ども一人ひとりの様子や発達に応じて、安心して眠ることができる環境や関わり方について検討していく必要がある。また、職員同士で子どもの姿を共有しながら、担当制保育の良さを生かした寝かしつけの方法を継続して実践していきたい。

(6)遊びやおやつ

春や夏の頃は、0歳児と1歳児が同じ空間で一緒に遊ぶことが多く見られた。しかし、大人数で過ごすことで徐々に落ち着かないようすが見られたり、一人ひとりがじっくりと遊びこむ姿が少ないという課題があった。

そこで、朝や夕方の自由遊びの時間に担当制を取り入れ、担当チームごとに保育者や過ごす場所を分けて活動するようにした。0歳児と1歳児は同じ部屋に過ごしながらも、少人数で関わることを意識した。

また、お散歩や室内遊び、おやつの時間についても担当ごとに分かれて活動するようにした。

担当ごとに分かれて過ごすことで、少人数となり、落ち着いた環境の中で遊ぶ姿が見られるようになった。

また、1歳児が0歳児に優しく関わる姿も見られ、異年齢での関わりが育まれている様子が見られた。

さらに、同じ保育者や仲間と継続して関わることで安心感が生まれ、子どもたちが安心して過ごす姿が見られるようになった。保育者にとっても、一人ひとりの様子を丁寧に見ることができるようになった。

担当制保育を遊びやおやつの場面に取り入れることは、子どもにとって安心できる人的・環境的な基盤をつくることにつながると考えられる。また、年齢別に分けるだけでなく、0歳児と1歳児の少人数チームで活動することで、異年齢児同士の関わりが生まれ、思いやりや社会性の育ちにもつながると感じた。今後も子どもたちの発達や関係性を踏まえながら、担当制保育の良さを生かした活動の工夫を行ってきたい。

【コーナー保育】

担当制保育を実践しながらコーナー保育についても力を入れて取り組んできた。

コーナー保育を行う以前は、保育者が玩具を用意し、その玩具のみで遊ぶことが多かった。そのため、子どもが自分で遊びを選ぶ姿は少ない状況であった。

<春の頃の室内遊び>



8月頃より、棚を子ども目線に合わせて設置し、発達や興味に応じた玩具を設置した。これにより、子どもが自分で遊びを選び、やりたい遊びを見つける姿が見られるようになった。また、コーナーを充実させるために段ボールで柵を作り、遊びの空間を区切る工夫を行った。

<仕切りを使ったコーナー遊びの様子>



11月頃には、職員同士で保育環境やコーナー遊びのアイデアを出し合い、実践を重ねた。その中で、コーナーを2つ程度に分けることで空間の広さが適切となり、子どもが落ち着いて遊べる環境となった。

さらに0歳児と1歳児の遊び方や興味に変化が見られるようになった。1歳児は、おもちゃごとや型はめパズルなどに集中して遊びたい様子が見られたが、0歳児が興味を持って手を出してしまう場面があった。そのため、0歳児と1歳児の遊ぶ空間を分けることで、それぞれが落ち着いて遊べるようにした。また、0歳児は玩具を多く出しておくだけでは遊びが広がらず、出すこと自体を楽しむ様子が見られたため、保育者が興味を持ちそうな玩具を手元に提示する関わりも取り入れた。

結果としては、棚の設置やコーナーの工夫により、子どもが自ら遊びを選び、主体的に遊ぶ姿が見られるようになった。また、コーナーを分けることで空間が整理され、落ち着いて遊ぶ様子が見られた。さらに、年齢ごとに空間を分けることで、1歳児は集中して遊び込むことができ、0歳児も安心して遊ぶ姿が見られた。

コーナー保育は、子どもが自ら遊びを選び、主体的に関わる力を育てるために有効であると考えられる。

また、遊びの空間を区切ることで環境が整理され、子どもが落ち着いて遊べるようになることが分かった。

一方で、0歳児と1歳児では発達段階や遊び方が大きく異なるため、それぞれに応じた環境設定や関わりが必要であると感じた。特に0歳児に対しては、玩具を設置するだけでなく、保育者が適切に提示することが重要であると考えられる。

今後は、子どもの興味や発達に応じてコーナーの内容や玩具の種類をさらに工夫し、遊びの集中が持続するような環境を整えていく必要がある。また、子ども一人ひとりの遊びの様子を丁寧に把握しながら、より良いコーナー保育のあり方について検討を重ねていきたい。

＜まとめ＞

1年間を通して担当制保育を取り入れ、様々な場面において、特定の保育者が継続して関わることを大切にしてきた。その中で、子ども一人ひとりの様子や変化を丁寧に把握することができ、安心して過ごす姿や自分の思いを表そうとする姿が多く見られるようになった。

また、担当の保育者が中心となって関わることで、子どもの生活の流れや興味関心を理解しやすくなり、個々に応じた関わりや環境作りに繋げることが出来た。さらに、保護者とのやりとりにおいても子どもの具体的な姿を伝えやすくなり、信頼関係の構築にもつながったと感じている。

一方で、職員配置や勤務体制によっては担当の保育者が十分に関われない場面があることや、年齢や発達に応じた関わり方や環境構成を継続して検討していく必要性も見られた。今後も子ども一人ひとりの発達や気持ちに寄り添いながら、担当制保育の良さを生かした関わりを大切に、子どもが安心して生活できる環境作りに努めていきたい。